

7 岡田茂（映画界の巨人）インタビュー

●映画界へ

福田：本日はよろしくお願い致します。

まず、岡田さんがですね、最初に東横映画に入られた時のことから伺いたいんですけども。最初、日清紡ですか？繊維会社にでも入ろうって考えてらっしゃった？

岡田：最初はね。まあどうせ製造業の方が良いと。僕は銀行とかなんかは向かんからね。

これが僕の街でね、これこそ僕らの先輩であり、酒一緒に飲んだ人なんだよ。黒川渉三さんというんだが、これが僕に曰くね、「お前ね、そりゃあな岡田君、製造業もわからんでもないが、もう繊維のとこいくのはやめろ」と。「なぜ駄目か言おうか」と。

「入ったらね、要するに労務管理だ」と。「やったって面白くないぜ、そりゃ」言うんだよね。そんなもんかなと思ったよ、俺もすぐに。それじゃ面白くねえなと思って、でまあ「これからは日本人で飢えとるのは戦後は娯楽だ」と。「食べ物だとかもそうだけど娯楽が一番飢えとる」と。「娯楽の世界を始めるんだから、今は東宝だとか松竹だとかがね歴然としとるが、この東横映画なんていうのは誰も知らんよ」と。「しかしこれは東急が背景におるんだから、すべてやるんだから、直でね。決して変な会社になりやせん。伸びるよ」と。「まあいずれにしても、尻に巻かれるよりはね、こういうとこ入っといた方が得だぞ」と言わんばかりに僕を薦めるんだよ。

「ああそうですかあ」と。「まあ今晚、一緒に飲もうよ、ともかく。俺んどこに来い！」と。家行ったら、マキノさんてね、マキノ光雄と言ってね、弟だよ。弟プロデューサーなの。それが根岸寛一の子分なんだよ。

そこへ根岸さんも来てるんだよ。皆集まってね、酒ね、飲んでるんだ。わーわーやつとる間に、根岸さんどこが気に入ったのか、「岡田くんあんた向いてるよ、映画会社に。やれ」と。そうするとね、マキノさんもね、「そーや、お前ええかもしれんな。お前何やりたいんや？」って言うんだよ。関西弁でね。「何やりたいって言ったって…」「どうや、監督になりたいか？」って言うから、「監督になりたくない。俺、芸術の方じゃない。もっとプロデューサーの方がいい。」「それはあかん！プロデューサーはうちの会社に俺しかおらん。それはお前無理やで」と言うから、「そうですか。」「わかった、撮影所に来い！撮影所に入れるからそこで自由に現場をやった方がいい。進行係とかね、最初はね、弁当運びみたいに思うかしらんがね、全部の人間知らなきゃいけない。撮影しに京都に行け」と、しかも…。こういうわけだね。そこで決まっちゃったんだよ。

福田：頼みに行って…

岡田：そうそう何とはなしに、そこの黒さんとこでグダグダ言いながら…。

「お前ねー、良い素質持ってるそうだから、やれ」と。「必ず成功するよ。こっちの方で偉くなれるから、やれ」ということでマキノさん非常に進めるんだよ。「お前、

映画会社に合ってるよ」と言うもんだからね。それでなんとなく「そうかな。この人言うんならなあ」と思って、そのままなんとなく入ったと。

●終戦直後の映画界

岡田：寮いうのは面白いんだよ。寮っていうのはね、都ホテルのね、知ってるか？

福田：あの蹴上の。

岡田：その隣なんだよ。良い場所なんだよ。ほほ一、隣はホテルだなと思ってな。その隣だけど、ちゃんとしたビルなんだよ。

そこへ入っていったら部屋がいっぱいなんだよ。もう女優はおるわ、男優もおるわ、それにプロデューサーも企画屋もおる。満州から引き揚げた人たちも何人か住んでる。ギュウギュウ詰めなんだよ。

福田：当時、東大でらっしゃいますよね？東大出ていきなり撮影所とか、その結構そういうカルチャーショックとかあれはなかったんですか？

岡田：まあそれは、感じない。まあなんとなく暫くね、様子見な何とも言えないからと思ってね。しばらく馴染んでみようと思ったけど…。まあ中へ入ってみると、実際はね、当時の撮影所の様子を喋ると、「そうですかー」言うぐらいのもんだよ。一番うるさいのがね、照明係なんだよ。上へ全部ライト吊るしておるんだね、あれもね。汗ダクダクになるしな、めちゃくちゃに暑い。冬はまあまあ暖かいけど。それにしても重たいあの大きなライト担いでやりよったんだ。まあそれはこれは大変だな、この連中も思いながらね。一番暴れん坊ばかりなんだ。それから大工さんね。要するに美術の。これもね、満映帰りが多いんだね。

福田：結構、東映は満映帰りが・・・

岡田：そうそうそうそう。これはね、何故かと言うとね、満映言うのはね、あなたご承知かどうか知らんけども、昔の・・・

福田：甘粕・・・

岡田：甘粕（正彦）さんがね、やったんだよ。甘粕さんが何を考えていたのか僕もいまだによくわからん面もあるんだが、左翼が多いんだよ。日本で。どちらかと言うと左っけの大学を出た新聞記者もおる、こういうのを全部あれ連れてきてんだよ。

中には根岸寛一もそんなところにおったんだよ、マキノ光雄もそうなんだよ。皆、甘粕さんの家来なんだよ。

それが結局、戦後ね、甘粕さんこれ飲んで自殺しちゃった。内田吐夢から詳しく聞いたよ、あの時ね、「先生、どうしたんですか？親分」って。「いや、吐夢さん、さよなら」言うてね。「俺も泣く男じゃないのが泣いたよ」と言ってたからね、それくらい甘粕さんは慕われてた。「それはもう甘粕っていうのは右も左もないよ」と。「思想じゃねえんだ」と。人間的に皆慕つとったと言うから間違いないね。

これから日本を変えなきゃいけないと思つとったんだろうな。甘粕さんもね。それに

はもっとね、満州からね、日本人と満州をね、うまく合わせなきゃ駄目だというような、思想のような人だった。

なぜ、そういうことを言うかというね。撮影所に入ったらね、なんかセットじゃないしにステージがあるだろ？その裏の方へね、皆なんか今でいうホームレスじゃないけどもね、なんか板張りの家みたいなね、なんかずーっと並んでんだよ。なんだかね、ここはって。そういう引き揚げ者いるんだよ。そこで入って初めてわかったんだけど、ご飯もそこらで炊いてんだよ。ほほー。「この人たちは誰か」と。「俺は大工だ」と。「美術部だ」と。「そう」と。それからそこで皆、一緒に共同生活してるんだよな。不思議な人だなと思うくらい、皆ね、そういう連中、“満映族”がね、氾濫しとったよ。カメラマンにもおったしな。それから何人もおったし。ほとんど東映、東横映画の初期は“満映族”だったんだな。そういう時代ですよ。

●新入社員時代の武勇伝

岡田：「熱海の海岸 ♪」という歌があるわな。

福田：「金色夜叉」？

岡田：「金色夜叉」のね、あれがね、「金色夜叉」につけられちゃったんだ。熱海ロケでもいくのかと思ったらしいんだよ。「熱海作ろう」言うんでね。そうしないとロケ行く言うんなら間に合わへんよ、言うんでね。

ディック・ミネが出るんだよ。ところがね、「時間がない」と。「とにかく早く撮って欲しい」と。「そうしないと朝一番に帰らなきゃ、仕事があるんだ」と。「東京帰らないかん」と。僕に言うてくるし。

ところが電気事情が悪くてね、停電なるんだよ。そうすると時間約束出来ないんだよ。マキノさんも、「俺に言ったって知るかよ、電気が止まれば撮影できへんで」って言う。

しょうがないから僕は電気会社に行ってね、電気会社いったってOKしないから、「1人頼むわ」言うてな、何をしたか言うと、うちの変電所の人間をな、連れて行って、「お前いざとなったらこれやれよ」と。

それから現場の連中。それと話し合って「頼むわ」と、「やらしてくれ！間に合わないんだ」と。「助けてくれ」言うんでね。「また良いことするから。一杯おごるよ」言うんで、「だけでも早くやってよ、そいじゃ」言うんで、「わかった」と。で、助けてくれてな。今でも思い出すよ。「本当徹夜でやらなきゃ間に合わんからやってくれ」と。

そしたらね、マキノ正博さんがうるさいこと言うんだよ。見とってね、「駄目だ。こんなエキストラじゃ。ダンサーじゃねーじゃないか、こいつら。こんな田舎ッペみみたいなダンサーで踊れるか、映画撮れるか」って言うんだよ。「そんなこと言っただ、あ

んたしょうがないじゃないですか！これもうねエキストラ屋が入れてんだから」って。
「イタイヤ、ダメダメ。ダメだ。そんなもんじゃ撮らないよ。」しょうがないから「本物連れて来い！」って言うんだよ。「それじゃなきゃ回さない」言うんだよ。しょうがないからね、電気がやっとなるようになったのにね、「それくるまでやらん」言い出すから、「ダンスホールないか、近くで」って。
それで行ってね、偶然そこにね、僕の中学の仲間なんだ。「お前何やってんだ？ここで」偶然会ったから遊びに来てんのかと思ったらね。「俺今ここでね、あれやってんだ」と。「副支配人になってるんだ」て。

福田：ダンスホールの。

岡田：「ここでなってるんだ？」「実はこうこうこうだ」と。「ダンサーね、貸してくれ」と。「話つけてくれ」と。「なんぼだ？金は」言うことで「どうだ」言うと「わかった、俺に任せ」と。今でも忘れんがね、こいつがね、非常にやってくれたおかげでね、連れて帰ったら、「わかった、やろう。これならいける」と。マキノさん「これでなきゃあかんのや、お前」言うてね。

そしたら誰か変なのがやってきて、肩叩くんだよ。「なんや」言う「ちょっとあんたに話がある。岡田さんですか？」「そうだよ」と。「ちょっと来てください」「ここでええやないか」と。「いやいや、ちょっと来てください」。

ついて行ったんだよ。そしたらね、パッと戸を開けて、入っていったら、俺を囲むようにしてな、「何やな、用あるいうのは？」言ったら「あんた今日えらいことしてくれたな」「なんや」言うて「だってこのエキストラ入れるの我々の商売じゃないか」と。「それをね、こともあろうに恥かかしやがった。仕事の邪魔した」と言うわけよな。「それは俳優課長、演技課長の仕事やないか」と。「文句あるならそっち言ってくれよ」と。「俺は違う」と。「俺は、マキノさんが仕事しないから。あんなエキストラじゃ駄目や言うんだから、しょうがないじゃないか。監督撮ってくれなきゃ」と。理屈をピシッと言ったらね、「駄目だ」と。「そんな馬鹿なことあるか。俺らの商売邪魔しとる、コノヤローなめるな」言うことでね。

これはやばいなと思っとった。なんか1人がね、なんかごそごそ手つつこみやがった。このときパーッと俺は逃げた。追っかけてきたから足蹴飛ばしてやった。ばーんと。むこうひっくり返ったよ。そっからばーって逃げて、もう1回ステージに帰ったんだよ。そしたらね、ステージの真裏に穴があいとる、皆知らへんから。大工が出入りしとったんだよ。そっからもういっぺん外へ出てな。そしたら我々がね、そういう仕事の夜中に、徹夜やる時に眠れる部屋があったんだよ、一部屋な。そこに何人が寝転がっておったんだよ。そこへふぁーって行ったんだよ。しばらく様子見なしょうがない、と。寝込んじやったよ、こっちも。そしたらマイクでなんだかんだ呼んでるんだよ。わしの名前呼んでるんだよ。「岡田さん、岡田さん」言うて。「どこいますか？ 連絡してくださいよ。すぐ近くの制作の部屋に皆待ってますから、連絡してくださいよ」

と。行ってみると皆集まってるんだよ、本当にね。そしたらそこにね、「おったおった、良かった。あんたやられたと思って心配してたんだよ。どっかに引っ張り込まれたんじゃないかと思って心配しとったんだよ。おってくれて良かった良かった」って皆言うんだよ、マキノさん以下。その中で1人だけね群抜いたのが、千本組のね、親分おるんだよ。京都は全部千本組の親分だからね。それでね「悪いけど、今日昼に手打ちやろうや」と。「手打ちってなんですか？」言うたら「そこで仲直りや」と。手打ちやる言うのは、結局喫茶店でやるんだよ。喫茶店しかないんだから。コーヒー飲んでまあいろいろ「仲直りしてくれ」と。「今、おやっさんからも言われたからすまん」と。「わしもよう知らんうちにエキストラやったり、いきなり使ったりと、知りもせんよ」と。「ああ、わかってる、わかってる」言うんで…。

そこで一件落着いたんだけど、有名になっちゃったんだよ。「あいつ、何だ、何だ」って。「ひ弱い奴かと思ったら、相当のタマだぜ」って。こっちはね、僕は柔道やってたからね、割かし腕つぶしには自信持ってたんだよ。むこうにはかなわんからな。というような連中が皆おったから、まあまあそれから有名になっちゃったと同時に、なんとなくね、皆接近してきたから、いろいろと。まあこれはね、第一歩でうまくいきだしたと。

●時代劇が規制されて…

岡田：東映いうとね、なんてったって時代劇をやらざるを得ないと。ところが、時代劇はやれなかった、

福田：GHQの。

岡田：GHQの監視でね。そこでね、結局、時代劇役者、(片岡)千恵蔵さんとか、(市川)右太衛門さんとか、大友柳太郎とかいうようなのが皆ね、何をやったかって言うとね、要するに現代劇やっとなんだよ。それをね、変な話だよ。チャンバラができないから、チャンバラのかわりのアクションだからね、随分当たったよ。「多羅尾伴内」なんてのもそうだしね。なんだかんだって、いっぱいありましたよ。

要するに時代劇的な現代劇やっとな。まあ要するに千恵蔵先生なんか、一番得意な「多羅尾伴内」なんか、こっからぱっとね、剣が振れないからピストルをパッとポーンと。

福田：チャンバラの。

岡田：ああいうやり方やるんだよな。

●“難産”だった初作

福田：最初の企画としてやられたのが「きけ、わだつみの声」ですね。

岡田：これはね、まもなく経ってね。もう大変なんだよ、金が無くてね。潰れるんじゃないかということになって、これが面白いんだ。五島慶太翁が突如現れたんだ、京都へ。

そしてね、「けしからん」と、「こんなに赤字出したんじゃ、俺はもう1つ運輸業やってんだ」と。「船が一艘沈んだと思わなしょうがない」と、この会社。「しかし調べたら、高利貸しのお金を借りとる。けしからん」と、言うんでね。

皆、けらっとしとる。突如ね、「はい」と手を上げてな、「それよりも何よりも皆時間外くださいよー、五島さん。五島慶太翁」なんて平気で言うもんだから、「何言ってるの？お前。なんの名前だ？」「玉木潤一郎」言うてね、「時間外も払わんのに威張られちゃかなわん！」というような言い分のこと言っ、平気な顔してるもんだから、「撮影所はすごいなーと。俺が言ってもビクともしやがらん、どいつもね。若いのに聞きや、当たり前じゃないですかというような顔してる」と。こういうような雰囲気を見てね、五島さんも「これはね、案外面白いかもしれん」って。船一艘沈める前に何とかせなあかんと、どうしたらいいかって、皆ないんだから、ね。それからマキノさんもね、困り果てて、やっぱりこの時代劇調の現代劇やるしかないなと、当たるのは。

その時にね、僕は思ってね、学生時分の時にやったのが「はるかなる山河に」言うね、東大だけのね、学徒出陣のね、戦死した連中がおる。これらの記録いろいろ持ってきたと。これ非常に反響よんだのよ。これね。

僕も読んで「これ面白いな、これいいな」と思ってね。それからマキノさんにね、「これやりましょうよ。これいつまでも股座からピストル撃つやつばかりでは、ネタはないからね。飽きられます。飽きられてるんですよ。観たいと思わないもん。こういうのどーんとやったらどうですか」180度違う企画だからな。しかしマキノさんは偉かったよ。「そうか、そんな本売れてるか？」「間違いないですよ。責任持ちますよ」「責任持つからって多額の金かかんだぞ」と。これがなんつったってね、大変な企画であるけども、次第に時代をこう延ばすうちにね、タイトルかわちゃったんだよ。全国でやろうと、全国の学生から応募しよう。

福田：東大だけじゃなくてですね？

岡田：そうそうそう。これが「きけ、わだつみの声」よ。

企画も決まってね、やろうってことになったらね、千恵蔵さんとか月形龍之介とか、あんなのでほら「実は、こうこうこうこう企画出して、これやめてくださいよ」って。

「せっかくわしらがここまできて、多少でも黒字が出るようになった、1本2本出たんだから、この路線に行く以外ないじゃないですか」と。「もう駄目ですよ」と。僕はその目の前で言ったんだよ。「もうこんなばっかりやってたら、すぐ駄目になるのわかってるじゃないですか」「だけどこの企画は駄目だよ」と。「絶対こないよ、これは」と。皆言うんだよ。「保証します」と。月形の親父なんか、特に凄いんだよ。「こんなもん来たらお目にかかりたい。来るわけがないじゃないか」と。「いや、来る」と「あなたはそれは違う」と。マキノさんは「わかった。岡田の言うのも一理あるんだ」と。「これは来る可能性ある」と。「来たら大当たりするよと思うから、俺も認め

たんだ」と。多羅尾伴内なんかは1500万の時に、いきなり大作の『きけ、わだつみの声』は1200万」とこう言ったんだ。

福田：「多羅尾伴内」より安かった？

岡田：それはね、まず社長が言ったんだよ。「1200万円でやるぞ」と。「それでどうだ、」と。「算盤とれんか」と。「1200万なら撮れますよ」と営業かなんかが言ったんだな。

そしたら、「わかった、これでいこう」と。1200万なんか被さったのは今度は俺だよ。「岡田お前1200万でやってくれ」いうことで、「わかった、やりましょう」と言ったんだよ、僕は。

それで一切外部の者雇うのやめようと。社員だけでやろうと。そしたら、それにみんな乗ったんだよ。「よしやろう、我々で」と。

そのかわり全部新人、役者がね。全部があれ、社員。給料でしたからね。皆1つの、これで。これが良かったんだね。一致団結したのが…。そこでやせ細った連中、皆集めてね。これはもう皆食えないという場面を撮ったりして、やっと苦勞して仕上がったらこれが大成功。

ところが、五島慶太翁が「観たい」って来たんだよ。「試写室でね、岡田お前隣座ってな、説明してあげてくれ」と。終わったらね、あのね、五島慶太翁がおいおいと泣くんだよ、後半で。

僕もなんでこんなに、五島慶太翁感動したのかなと思ってね。「今、写真見て俺は泣いたよ」と。「実はな、岡田くん君、歳はいくつだよ？」と。「こうこうこうだ」と。

「そうかあ、俺の倅と一緒にだなあ」言うんだよ。そしたらブーゲンヴィルかどっかで亡くなったんだな、戦死したんだよ。「それでね、飛行機ね、乗ったらそんでやられちゃったんだ」と。「もうね、泣いたよ」と。泣くんだよ、また。「この写真見て泣いた、俺は」言うんでね、鬼の五島慶太翁が見て泣いたというのは宣伝してやろうと思ってね、今度はばーと広がっちゃってね、社内では。皆がんばろうということになってね。これが結果においてはね、第1回の大成功ね。これがひとつの立ち直りのきっかけを作ったことは少なくとも事実ね。

●東映時代劇の黄金時代

福田：時代劇を東映が撮られ出した時に、岡田さんだいぶあの一、後の、萬屋錦之助さん、中村錦之助さんとか、東千代之介さんとか、古典芸能の關係の、歌舞伎の方、だいぶ引き抜かれますよね？

岡田：そうそうそう。これは非常にね、皆ね、中には今、歌舞伎が非常に流行ってるけども、歌舞伎はイヤだというのが出だしたんだね。この連中、映画でやりたいと。という事は、なんとなく飽きたんだね。まあこの連中がうちを非常に希望する。

それから美空ひばりの力も大きかったね。ひばりも松竹からこれはマキノさんが抜い

たんだよ、これはね。こっちきて、むこうで同じ顔ぶれで、いつも同じストーリーだから、こっちへね、新しいやつ、錦ちゃんと組みたいとかね、誰と組みたいとかいうようなことを言い出して、そうかそうかと。ひばりもうちに入っちゃった、まあいうことでね、次第に固まってきて、若手の時代劇の時代になっちゃったからね。

福田：大御所の千恵蔵さんとか、大友さんではなくて・・・

岡田：そうそうそうそう。次第にね、これ全部消えたわけじゃないですよ。しかしながら若手が伸びちゃったから。これがね、『笛吹童子』が第一発よね。この一発で決まったようなもんです。これは若いもんを入れないかと。これ2本立てでやると途端に大当たりするんだよね。まあこれでしばらく時代劇ブームの大きなきっかけできた。それから錦ちゃんのブームもできた。ひばりもおる、ようなことでね、しばらく時代劇ブームで、ウーってうちものっちゃってね。大変なうちも勢いになってね。完全にね、ある基盤を作ったことは事実。配給網が出来た。それから次第にね、映画館も何軒か直営館も作った。

その時に今度は「こればかりじゃ駄目やで」と言うんで、マキノさんもなかなかそういう点はよく教えてくれてたな。内田吐夢やとかなんかに撮らさなあかん、と。早撮りも良いけど、早撮りばかりの映画だけじゃ駄目だ。吐夢も『大菩薩峠』だとか『宮本武蔵』とかも撮ったけども。

福田：『血槍富士』？

岡田：いろいろやったけど、これは時間と銭がかかるわな。なかなか。

でもね、これは東映の1つの大きな方針になったからね。そうか、なるほど。こういうものも入れなきゃ駄目だなと。要するにプログラムピクチャーばかりじゃ駄目だということがね、僕らも本当に身を持ってわかったから、「よし、これはやろう」と。こういうものを置きながらどんどんどんどんとプログラムで儲けていこうという、ひとつのシステムが出来たことは事実ですね。

●最大のライバル登場

福田：東映はシェア1位になってますね、映画界でね。トップメーカーにそういう流れの中でなったと。同時にその頃、またテレビが出てくる時代になりますね。

岡田：テレビが出てきだした、これをどうするかというような問題もあったけどね。僕はまだ時代劇で行こうということでやとったけど、不思議にね、これは流行性原理、僕は題名つけたんだけど、流行性の原理があると、これ。

これはすべて流行性のものは映画に限らずね、本でもそうだと。芝居でもそうだと、歌がそうじゃないかと。これはざーっと、メロドラマ流行る時はメロドラマ。さーっと消えるよ、流行性のものは。女性の服装と変わらへんという原理がね、これが正しいなと思い出した。その中で映画も同じだと思い出してね。この映画がね、時代劇がこうなりだしたら、止めようがないんだよ、もう。これね、ほんとね。どんどん来だし

て35、6年頃になると、どんどん駄目になっちゃった、これね。

こう、波が、大きなうねりが来ちゃった、という時に僕は考えてね。「駄目だな、これは」と。「このままじゃ、うちらは貧乏な東横映画、今は東映だけでも、東映ってのはこのままいくと衰退の一途をたどるな」と。「映画儲けようと思ったら他所のやらないもんをやらなきゃ駄目だ」という風に思ってね、思い切ってね、変えようと思ったの。

これはもうね、思い切ってやろうと。やるためには時代劇やめないかん。これテレビに移そうじゃないか、と。こういう観点に変わったのよ、ね。これ全部やめるんじゃない。テレビ映画で見てもらおうじゃないかと。テレビに移そうじゃないかと。

福田：時代劇をテレビにと？

岡田：そうそう。時代劇はテレビにしようと。こういうわけでね、まあいろいろあったけども、方向を決めたの、はっきりと。テレビはもうね、全部時代劇に切り替えようと。

映画はね、ヤクザ映画にしようと。任侠、ヤクザという風にね。

その時に鶴田（浩二）やとかなんかをうまく使って、鶴田だとかなんかアクション映画、新東宝倒れたでしょ。そのときに皆うちに流れてきた、アクションスターがね。これ皆、うまくうちにのってくれたから、これもありがたかった、皆ね。

まあいうことでね、アクションものはね、やっぱり東映はアクションなきゃ駄目だと思った。任侠へ移った。任侠映画やるならね、いろいろあるけども、これやろう言ったら、これがよう当たり出したんだ。

岡田：任侠たって話はそんなにないからね、時代劇の現代化だからね、結局は、任侠言うのは。それからやっぱりヤクザ映画もやらな、駄目だと、切り替えようと。プラスアルファで高倉健のね、「網走番外地」だとかだんだん変えていってね。それ以外に、鶴田も切り替えようと。幸い、その俊藤浩滋というね、おって、これが非常に映画が好きで、映画の半分プロだと思うくらい好きな男で、僕のところにきて、俺がね、「おい任侠からヤクザ映画に切り替えようと思うんだ」と言うたら、「俺も協力する」と。

「わかったわかった、やろう」と。これからですよ。うちのヤクザ映画が一気に伸し上がりだしてね。これがまた馬鹿当たりしだして、文字通り東映はヤクザ映画の東映かっていうくらいなったけど。これがしばらく続いたね。

●看板スターの独立

福田：深作さんや石井（輝男）さんの世代の監督がどんどん伸びてきて、いろんな俳優さん出てきますよね、菅原文太さんとかね

岡田：まあ結局ね、時代に合わせてこう出てきますよ。それからものによってね。こっちの役者、こっちの役者いうて区分するわけじゃないけど、歌と一緒にすよね。僕はね、

だから、皆が俳優倒れたらどうしようって言いよるから、「心配するな。俳優必ず次出てくる」と、「心配するな」と。

錦ちゃんなんかそうですよ。「錦ちゃんやめたら大変だ」と。「どうしますか？」って心配するけど、心配するなと。錦之助が僕のどこ来てね、どうしてもね、独立プロにしたいと。こういう流れの中で私やりたいんだと。「あなた失敗するぞ」と。「やめとけ」と。「それはね、あなた自分で経営ができるんだと思ってるけど、経営者とね、役者両立しないよ」と。「問題が起こる」と、必ず。「覚悟してますからやります」と。

「どうしてもやる」って言う。「それじゃわかった」と。「ただあんたね、やめるときは大川さんと喧嘩するなよ。大川さん激怒するよ、興奮して」と。「知らん顔してやめさせてください言うて、静かにやめるか」と。これだって僕アドバイスしたの。

うまくやっとうまく出たから、再びうちでやるときもね、誰も反対する奴はいないわな。あれ錦之助しかいないから、あの役。最初からこっち考えてやったんだから。あれ良い映画だったよね？

福田：はい

岡田：最後は大歌舞伎やったからね。

●映画をヒットさせるタイトル

福田：藤純子さんの「緋牡丹博徒」っていうタイトルを岡田さん考えた？

岡田：考えたの。うん。それなぜか言うたらね、タイトル言うのはね、「博徒」って書いたら駄目なんだよ、女性がやると「緋牡丹」。女性がやるタイトルね。なんか花の名前つけようよと。「そうすると緋牡丹良いじゃないか」と。「よし、これでいこう」。「緋牡丹博徒」でいこう。これ直感ですよ。僕はタイトルつけるのうまいんだよ。うちで当てたやつ、ほとんどつけたんだから

福田：「マル秘大奥」とか・・・

岡田：マル秘はね、マル秘の、これ判子押すようなもので・・・。タイトルで当たったね。ただテレビでやる時ね、関西テレビだよね。フジ系は。僕にね、「このマル秘だけは困る」と。これは駄目だからね、「一つマル秘だけやめて『大奥』にしてくれ。それは『大奥』でいこう」と。

髪型の型から着物ね、あれ全部揃えるの大変なんです。あれだけのものね。それもつたいない、そういつべんに償却はできないですよ、衣類はね。これを全部うちは持ってたから。蓄積がね。こういうのがあったから、できたんだね。これが今でも生きとるかと思うと不思議ではないよね。

●多角経営からの撤退

福田：当時、他にも例えばボーリング場やられたりとか、いろいろ多角経営・・・

岡田：ボーリングはね、私は関係してないから詳しく知らんけどもね、ボーリング当たったっていうんでね、事業部がやったの。最初は馬鹿当たりしとった。

だけどね、これは面白いこと言いましたよ。ガーさんというのがおるでしょ、東宝に、清水ガー（清水雅）っていうのが…。これが社長ね、僕を呼ぶんだよ。「あんたんとこもな、誰がやったんか知らんけども、ボーリングな、あんなもん手つけたらあかん」ってこう言うんだよ。「儲かってるよ、うち、ボーリングも。」「あかんから。なんでか言うたろか、あれはね、どんな奴でもできる商売や。」言うんだよ。「金さえあれば出来る商売や」と。「あんなものは簡単だ」と、「球転がしやないか」と。「映画はなかなか素人できへんのや」と。「おまえやれ、言うても。」と。「これはね、はっきりと別れるから、人が出来んものやらなきゃあたらん」で」とこう言うんだよ。「事業でも同じやで」と。これは良いこと教えてくれたと思ってね。僕はボーリングはね、あんまり積極的に手出さなかったの。やらなかったの

福田：結局、すぐ下火になりましたもんね・・・

岡田：あれもファッションだからね。うわーんと上がって、落ちるの早すぎた。

まあしかし時代の流れの中でいろんなこと勉強してきたけども、まあ必ずどんなものでも栄えるもの衰えるものあるよ。衰えたものでも10年経てばまた復帰の可能性あるからね。

福田：野球なんかいかがですか？

岡田：野球はね、やめた。これはね、儲からないんだよ、当時ね。宣伝にはいいですよ、名前売るのにね。だって、東映は映画ですっかり売れきつとるのにね、これ以上、売れる必要ないという感覚あったからね。これはね、バーンと売っちゃったんだ、思い切って。

誰がやったって儲からない。あれみたら。これ駄目だと。優勝した時だって赤だもん。水原さんでやった時も。これはあかんわ、思ってね。

●新路線の模索

福田：社長になられて、いろんなことされますよね？「宇宙戦艦ヤマト」とかアニメーションやったりとか。社長になられてからお考えになったことっていうのは？

岡田：まあこれはね。はっきりいって、あの時は皆ね、策がないんだよ、企画もね。映画を当てようと思ったら、予想ができないものをやらなきゃ当たらないんだよ。同じものをお互いやってたら両方とも当たりませんよ、これは。そんなもんですよ。まあそういうわけでね。どうも企画者もいない。自分にもこの、「よし、これやったら当たる」というのもひらめかん。こういう時きたらしばらく見てるよりしょうがないわな、慌てずに。まあしかしね、なかなかそれから次の手を使うまでは、なかなか大変だったよね。まあそれらの力も借りながら。

福田：過渡期、アニメがあったり、角川さんとか・・・

岡田：そしたら角川の力を借りて、あれがやった時代もありましたよ、何本かね。いずれにしても角川のやったのは当たったけども、うち儲からないんだよ、あれ、あんまり。本人が全部やったんじゃないかね。儲けがなくちゃしょうがないわな。これやっぱり著作権はないしね。

まあ、いろんなことやりましたよ、うちも本当に。だけどそれから以降はバカ当たりするの、流れがついてこれやったんだというものはなかったな。流れはつかない。再びつかなかったな。これやったんだってものがなかったな。流れとしてはね。

福田：単発は...

岡田：単発は...

福田：やっぱり実録ヤクザもので終わり。

岡田：単発以外に入ったと思ったんだ。単発でポンポンっていくしかないと思ったのは事実。

福田：なんでそういう風になっちゃったんでしょうね？

岡田：これは何て言われても、わからないんだよ。僕にしても。世の中の流れをどうしてもつかめない。それが1つなんだね。わからないというより言いようがないんだよな。

政治と一緒にじゃないですか？なぜ小泉さんが現れて総理になったのか、わからんという以外ないわね。しかもあれが天下にとって、誰も太刀打ちできんじゃないかという流れがついたのと一緒にですよ。

●次世代へのメッセージ

福田：これから映画界とか興行の世界っていうのはどうなっていくんでしょう？

岡田：これはね、今、アメリカがどんどん入ってね。デジタルというね、ものも出てきたし、シネコンという名前をつけて、そこへ皆集まろうじゃないかと。アメリカ映画も邦画も。多少こっちが損してもこっちで儲けてくれば良いようにね。興行会社になったのね、全部がね。大興行会社になった。興行会社と制作とは違うからね。これやっぱりその中で生きていって自分の作ったものをやっぱり当てなきゃ駄目。これはそのうちに僕はなんか必ず出てくる、必ず。

福田：そういう風に、シネコンとか体制整えても当てなきゃいけないということですね？

岡田：当てなきゃ駄目ですよ。それはソフトですよ。なんぼハードができてね。うちは映画館これだけなかったらね、洋画かけるって言ったって東宝と一緒にですよ。興行会社として、損はしない。だけどそれじゃつまらない。当てなきゃ。あなたの言うとおりの。プログラムピクチャーで当てなきゃ儲からないんだよ。

福田：大作じゃなくて。

岡田：大作じゃあね、儲からない。それは会社の格をあげるのには良いですよ。維持する

ために必要。年に一本二本やらんと駄目ですよ。没落するから、技術がね。しかしね、儲けな駄目。映画でね。これはプログラムで儲けなきゃ駄目なんだね。

福田：ある程度流れっていうの必要になって・・・。

岡田：必要。流れ必要なのよ。どうしても必要。

ただ言えることはね、映画を当てる原則というのは3つか4つしかないんですよ。泣くかね、笑うかね、それか握るかね。これはね、あれですよ、アクションその他のこと言うんですよ。

福田：手に汗握るという？

岡田：手に汗握るという。この3つか4つくらいの組み合わせしかないんだから。泣くか笑うか握るですよ。これを原則にしてどういう企画やったらくるか？と。

いずれにしても人の真似をしたら駄目よ。真似は真似だから。やっぱ自分独自のもの。「よし！これなら誰も引けをとらないものやろう」と。「人が出来ないことをやろう」と。ヤクザ映画当たったのそれですよ。東宝でやりましょうって言ったら出来ませんよ。松竹だって出来ませんよ。東映やったから当たったんですよ。そうでしょ？恐がとったらできやしない。一言簡単に言えるから言うんだけど。やっぱり人のやらんことをどう考えるか。黒沢（明）さんが優秀だったのは人がやらんことをやったんだよ、全てね。あの人の時代劇と我々の作った時代劇とは違うもの。

福田：全然違いますね。

岡田：異質の世界。独創的だったよね。むしろ他所が真似たよね。外国でも他所が真似たよね。それくらいにならなきゃ駄目。これも結局は長続きしないんだよね。同じひとつの流れというのは、不思議にね。